

## 第 14 回(2009. 4. 28 配信)

## 雲竹齋先生の歴史文化講座 - 「5 月は端午の節句」

5月5日は「端午の節句」で、男の子がいる家は、床の間に鎧・兜を飾り、庭先に鯉のぼりを揚げたりするが、もともとは月のはじめ(端)の午(うま)の日が端午の節句だった。午の音(おん)と同じ(ご)なので5の日になったものと思われる。この端午の節句は、季節の変わり目に病気や災害から身を守るため、平安時代から薬草や薬膳などで邪気を避け、悪魔を祓った習慣があったという。

端午の節句では、菖蒲の湯に浸かったり、粽(ちまき)や柏餅を食べたりするが、子供たちが菖蒲で飾った紙の兜をつけて、石合戦をしたという古い記録がある。これが江戸時代になると、菖蒲が「尚武」すなわち武をたっとぶことに通じるということで、端午の節句を「尚武の日」として祝うようになった。江戸城では、将軍に男の子が産まれると、表玄関に馬印(うまじるし)や幟(のぼり)など戦場で必要な道具を飾ようになり、これが武家の間にひろまったが、その風習が、端午の節句と重なり合って、5月5日に幟や鎧・兜などを玄関先に飾って、男の子の無事な成長を願うようになった。江戸の町民たちは、武家に対抗するため、馬印や幟の代わりに紙で作った鯉のぼりを揚げるようになったという。江戸町民は、鯉のぼりのように威勢が良く、腹に何も含むものがないということで、「江戸っ子は五月(さつき)の鯉の吹き流し」といって、潔さを自慢したが、一方の武家社会では「腹がない」ということで嫌った。なお、「鯉のぼり」の先端にある五色の吹き流しは、中国から伝わった陰陽道五行説にある木、火、土、金、水を表しているが、いわゆる風水の縁起からきている。

ところで、粽は節句の行事と共に中国から伝わったものだが、柏餅は寛永年間(江戸時代前期)にわが国で生まれた菓子で、柏の木は新芽が出ないと古い葉が落ちないことから、子が産まれるまで親は死なない、つまり家系が途絶えないという縁起担ぎに柏が使われたのだという。

鎧・兜は「甲冑(かっちゅう)」といって、武士が戦場で身を守るため身につける戦闘服である。日本では、縄文時代(1万数千年前～BC300)の遺跡からは戦があった痕跡は認められないから、長い間非常に平和だったと思われるが、吉野ヶ里遺跡(佐賀県)など多くの弥生時代(BC300～300)の遺跡から、周囲に掘をめぐらせた環濠聚落や、頭部がなかったり、矢じりが突き刺さったりしたままの人骨が多数発見されて、激しい戦乱を物語っている。弥生人は縄文人とは違う人種で、どこからか渡来してきた新種のモンゴロイドではないかと思われるが、それでは縄文人はどこへ行ってしまったのだろうかという疑問が残る。それにはいろいろと面白い説があるのだが、それは別の機会に譲るとして、弥生時代から古墳時代の頃まで(3世紀～7世紀)の甲冑は、短甲と呼ばれる木製や鉄製の胸当てに近いもので、当時の刀は直刀である。これは主として突きが戦法だったからだろう。

「太刀」とは「刀」のことだが、厳密に言えば、ふだん腰に差している時に刃を下に向けて差すのを太刀と呼んだ。刃を上にして帯に差すのを刀という。いずれも片刃のものをいうが、これに対して両刃のものを「剣」とよぶ。剣は刀身の根元に茎(なかご)という短い突起があって、ここに柄を差し込んで使う。なお、刀身の根元が袋状になっていて長い柄に差し込んで使うのを矛(鉾)という。どちらも両刃で突いたり刺したりする武器である。弥生時代から奈良時代の頃までは、主として「反り」のない直刀だった。したがって、剣あるいは矛が主要な武器だったと思われる。戦法が「突き」から「打つ、斬る」に変わってきた中世から、反りがあった方がよく斬れるので、反りのある刀が主流になってきた。

中世になると、馬に乗り弓と太刀による戦法が確立されて、大鎧と呼ばれる美しい鎧兜が出現する。この大鎧と呼ばれる甲冑は他国には例がなく、日本特有のもので、これが甲冑の主流となった。この派手なふん装は、自分の位置を示したり武威を誇ったりするためだったと思われるが、一説によると「死装束」だったからだともいう。この大鎧は、あくまでも騎乗による武士の弓矢に対する防具であり、馬に乗らない歩行(かち)の兵士たちは、胴丸あるいは腹巻、腹当などと呼ばれる、主として胴を包み込む防具を用いた。平安絵巻や絵本、羽子板などに出てくる甲冑は、このころの大鎧を描いているものが多い。近世になると、これまでのような名乗りを上げてから一騎打ちをする戦法が、鉄砲の普及によって、歩行の槍、鉄砲組による戦法へと変わってきた。それに伴って、胴丸が変化発展した軽くて動きやすい「当世具足」と呼ばれる甲冑が主力となった。

天正 12 年(1584)羽柴秀吉と徳川家康が戦った「小牧・長久手の戦」で、秀吉軍の池田勝入斎恒興を討ち取った永井直勝は、刀・脇差・槍と共に黒糸威の甲冑も分捕った。これが永井家の家宝となったが、天下が徳川のものになったある日、池田輝政(恒興の子)は当時 5 千石だった永井家を訪れて、父恒興の甲冑を見て「父ほどの者を討ってもたった 5 千石とは」といって涙を流した。これを伝え聞いた家康は、永井直勝に 5 千石を加増して 1 万石の大名にしたという逸話がある。講談だから信ぴょう性はない。

幟は、鎌倉時代から武士が戦場などで敵味方を識別する標識として発展してきた。戦場では、総大将が自分の位置を示し、武威をほこるために大きな「幟」を立てた。幟とは、旗竿にくくりつけた縦長の細い幕で、絵や文字が書かれているものだが、たとえば、武田信玄の「風林火山」や上杉謙信の「毘」、あるいは真田幸村の「六文銭」などが有名である。幟のほかに、旗の形をしたものを「旗印」といい、総大将や武将たちが、幟と同じように自分の位置を示したり武威を誇ったりするために掲げた。また、個々の武士たちが、自分の位置と功名を周囲の者や総大将に誇示するために、甲冑の背中に指したものが「旗指物」である。戦場では、総大将はこの幟旗の脇に「馬印」という飾りを立てた。たとえば織田信長の「唐人傘」、豊臣秀吉の「千成り瓢箪」、徳川家康の「金扇」などがよく知られている。

NHKの大河ドラマ「天地人」では、直江謙続の兜の前立に「愛」の文字が付いている。これは主君や領民に対する愛情から云々という人がいるが、上杉謙信は自分の守り神が「毘沙門天」だから、幟に「毘」を書いた。それを真似て直江謙続は「愛染明王」の「愛」をつけたのだというのが本当らしい。ちなみに、直江謙続は戦場から農家の女子供を捕虜として連れ帰り、競売を開いたという。何が「愛」だ。雲竹斎は信州川中島の生まれである。わが先祖は、上杉や武田に田畑を荒らされ、虐殺されたに違いない。越後の上杉や甲斐の武田は先祖の敵である。

余談だが、最近の若い女性の間では戦国武将に人気が集まっているという。男だか女だかわからない「草食男」が多くなった昨今、いわゆる男らしい「肉食男」にあこがれる女性の心理が影響しているのかもしれないが、なかでも最も人気のあるのが真田幸村だという。大阪の陣で徳川家康の本陣を二度も攻撃し、その都度必死になって逃げた家康は、その恐怖から馬の上でウンコを漏らしたという話が残っているくらい有名な武将で、「真田日本一のつわもの」と国の内外から称えられた。若いころ信州上田城で父の真田昌幸とともに徳川の大軍を 2 度に亘って撃破したことで有名だが、雲竹斎は信州で生まれ、上田で学生時代を過ごしたから、真田幸村は、いわば同郷の士である。上杉や武田とは違って親しみを感じる。